

東南アジア史学会会報

No.47

昭和62年10月

目 次

昭和62年度春季総会摘要	1
第11期第3回委員会	2
第37回研究大会 プログラムと発表要旨	2
研究短報	15
会計報告	18
地区研究例会	18
新入会員・住所変更等	19
『東南アジア 歴史と文化』原稿募集・執筆要領	21

昭和62年度春季総会摘要

上記総会を昭和62年6月7日京都大学楽友会館で開催し、市川健二郎委員が議長となり、次の議事をはかった。

《報告事項》

1. 会長より、以下の委員の交代について報告があった。
(庶務) 桜井由躬雄、(会計) 渡辺佳成
2. 庶務委員より新入会員8名の紹介、学会会報46号の発行、日本学術会議への学会登録について説明があった。また、『会員著作目録』の作成について、現在の進捗状況の説明があり、会員の御協力をお願いする旨依頼があった。
3. 編集委員より『東南アジア 歴史と文化』の発行を平凡社より山川出版社に移管したこと、及びバックナンバーの在庫を平凡社より買い取ったことについて説明があった。
4. 会長より、永積委員に代わってIAHAの副会長に石井会長が選出されたことについて説明があった。
5. 関東、関西の地区委員より、各地区的例会開催状況が紹介された。九州の地区委員より、地区例会開催を準備している旨報告があった。

《審議事項》

1. 会計委員より昭和61年度決算報告があり、会計監査委員より監査報告があった。総会は同報告を承認した。
2. 大会委員より、昭和62年度秋季大会を12月、関東方面で開催する予定である旨報告があった。

東南アジア史学会会報

No.47

昭和62年10月

目 次

昭和62年度春季総会摘要	1
第11期第3回委員会	2
第37回研究大会 プログラムと発表要旨	2
研究短報	15
会計報告	18
地区研究例会	18
新入会員・住所変更等	19
『東南アジア 歴史と文化』原稿募集・執筆要領	21

昭和62年度春季総会摘要

上記総会を昭和62年6月7日京都大学楽友会館で開催し、市川健二郎委員が議長となり、次の議事をはかった。

《報告事項》

1. 会長より、以下の委員の交代について報告があった。
(庶務) 桜井由躬雄、(会計) 渡辺佳成
2. 庶務委員より新入会員8名の紹介、学会会報46号の発行、日本学術会議への学会登録について説明があった。また、『会員著作目録』の作成について、現在の進捗状況の説明があり、会員の御協力をお願いする旨依頼があった。
3. 編集委員より『東南アジア 歴史と文化』の発行を平凡社より山川出版社に移管したこと、及びバックナンバーの在庫を平凡社より買い取ったことについて説明があった。
4. 会長より、永積委員に代わってIAHAの副会長に石井会長が選出されたことについて説明があった。
5. 関東、関西の地区委員より、各地区的例会開催状況が紹介された。九州の地区委員より、地区例会開催を準備している旨報告があった。

《審議事項》

1. 会計委員より昭和61年度決算報告があり、会計監査委員より監査報告があった。総会は同報告を承認した。
2. 大会委員より、昭和62年度秋季大会を12月、関東方面で開催する予定である旨報告があった。

第11期第3回委員会

昭和62年6月7日に京都大学楽友会館で委員会を開催した。出席者17名。会長が議長となり、各委員の報告を受けた後、上記総会での協議事項を審議決定した。

第37回研究大会

昭和62年6月6日（土）・7日（日）の両日、京都大学楽友会館で開催された。大会プログラムと発表要旨は次の通りである。

6月6日（土）

開会の辞

藤原利一郎

〈個人研究発表〉

「三仏齊口口國」について

深見純生（摂南大学）

阮氏治下（16～18世紀）の『公田』と将臣・社長について

—ベトナム中部の「社」について考察するために—

後藤尚子（名古屋大学・院）

インドネシアの「紅はこべ」論

一大衆文学論へのこころみー

押川典昭

東南アジアのエスニシティ論と国民国家

—民族主義と国民主義について—

綾部恒雄（筑波大学）

特別講演

Islamic Awakening in Malaysia and Its Impact on the Muslim Minorities
in Thailand and Singapore

Omar Farouk（Malaya大学教授、京都大学客員教授）

6月7日（日）

〈共通論題〉 日本における東南アジア史研究の総括と課題

趣旨説明

桜井由躬雄（京都大学）

フィリピン

早瀬晋三（鹿児島大学）

インドネシア

大橋厚子（東京大学・院）

ベトナム

高田洋子

タイ

橋本 卓

ビルマ

渡辺佳成（京都大学・院）

会員総会

栗原 悟（相模女子大学）

雲南

池端雪浦（東京外国语大学）

総合コメント

総合討論

石井米雄（京都大学）

閉会のあいさつ

第11期第3回委員会

昭和62年6月7日に京都大学楽友会館で委員会を開催した。出席者17名。会長が議長となり、各委員の報告を受けた後、上記総会での協議事項を審議決定した。

第37回研究大会

昭和62年6月6日（土）・7日（日）の両日、京都大学楽友会館で開催された。大会プログラムと発表要旨は次の通りである。

6月6日（土）

開会の辞

藤原利一郎

〈個人研究発表〉

「三仏齊口口國」について

深見純生（摂南大学）

阮氏治下（16～18世紀）の『公田』と将臣・社長について

—ベトナム中部の「社」について考察するために—

後藤尚子（名古屋大学・院）

インドネシアの「紅はこべ」論

一大衆文学論へのこころみー

押川典昭

東南アジアのエスニシティ論と国民国家

—民族主義と国民主義について—

綾部恒雄（筑波大学）

特別講演

Islamic Awakening in Malaysia and Its Impact on the Muslim Minorities
in Thailand and Singapore

Omar Farouk（Malaya大学教授、京都大学客員教授）

6月7日（日）

〈共通論題〉 日本における東南アジア史研究の総括と課題

趣旨説明

桜井由躬雄（京都大学）

フィリピン

早瀬晋三（鹿児島大学）

インドネシア

大橋厚子（東京大学・院）

ベトナム

高田洋子

タイ

橋本 卓

ビルマ

渡辺佳成（京都大学・院）

会員総会

栗原 悟（相模女子大学）

雲南

池端雪浦（東京外国语大学）

総合コメント

総合討論

石井米雄（京都大学）

閉会のあいさつ

発表要旨

〈個人研究発表〉

「三仏齊□□国」について

深見純生

宋代から明代初期の、つまり10世紀中頃から15世紀中頃までの漢文史料に見える三仏齊は通常刻文史料のシュリーヴィジャヤに同定され、また現在の通説ではその都は11世紀の後半にパレンバンからジャンビに移ったとされている。そしてこの時期のマラッカ海峡地域の歴史はシュリーヴィジャヤ史として再構成されている。

宋代の三仏齊に関する最も重要な研究である桑田六郎先生の「三仏齊考」〔桑田 1945a〕とその後学会に紹介された元豊二年(1079)の碑文「広州重修天慶觀記」の検討を通して、私は、三仏齊について定説とはかなり異なる考え方方が可能ではないかと考えるに至った。

それは、元豊年間(1078-85)の史料に見える「三仏齊某々国」——具体的には三仏齊詹卑国と三仏齊注輦国——は同じ時期にみられる「大食某々国」と同じ表現と考えられるというもので、この考え方によれば三仏齊は特定の一国を意味せず、総称であったということになる。

この観点から従来史料の混乱、あるいは史料の誤りとみられていたことがらが、合理的に解釈できるのではないかと思われる。三仏齊詹卑国は三仏齊という地域の中の詹卑国(詹卑は通説ではジャンビ)、三仏齊注輦国は三仏齊という地域の中の注輦国ということである。注輦は通常は南インドのチョーラであるが、三仏齊注輦は東南アジアにおける言わばチョーラの出先勢力ということになる。

大食の場合も総称であることが無前提に明らかなわけではなく、問題の時期の史料に大食某々国という表現があつて初めて大食が総称であることが判明するのである。三仏齊が総称であることが認識されなかったのは、具体例が三仏齊詹卑と三仏齊注輦の二つしかなく、かつ後者が南インドの注輦(本国)と混同されたという特殊な事情によるものと思われる。

こうした三仏齊=総称説に立つならば、従来三仏齊=シュリーヴィジャヤとして再構成されてきたこの地域の10世紀から15世紀にかけての歴史は全面的に再検討する必要があると考えられる。

「阮氏治下(16-18世紀)の『公田』と将臣・社長について —— ベトナム中部の「社」について考察するために ——

後藤尚子

ベトナムの村落=社は、既に19世紀から、ベトナムの社会構造を理解する上で鍵であるとして注目されてきた。19世紀の公田=村落共有田の社による自律的な管理は、その特徴の一つとされ、村落の自律化は、15世紀には国有田であった公田の村落共有田化に平行して成立するものと理解されている。それに伴って、村落の長は、知県による選任か

発表要旨

〈個人研究発表〉

「三仏齊□□国」について

深見純生

宋代から明代初期の、つまり10世紀中頃から15世紀中頃までの漢文史料に見える三仏齊は通常刻文史料のシュリーヴィジャヤに同定され、また現在の通説ではその都は11世紀の後半にパレンバンからジャンビに移ったとされている。そしてこの時期のマラッカ海峡地域の歴史はシュリーヴィジャヤ史として再構成されている。

宋代の三仏齊に関する最も重要な研究である桑田六郎先生の「三仏齊考」〔桑田 1945a〕とその後学会に紹介された元豊二年(1079)の碑文「広州重修天慶觀記」の検討を通して、私は、三仏齊について定説とはかなり異なる考え方方が可能ではないかと考えるに至った。

それは、元豊年間(1078-85)の史料に見える「三仏齊某々国」——具体的には三仏齊詹卑国と三仏齊注輦国——は同じ時期にみられる「大食某々国」と同じ表現と考えられるというもので、この考え方によれば三仏齊は特定の一国を意味せず、総称であったということになる。

この観点から従来史料の混乱、あるいは史料の誤りとみられていたことがらが、合理的に解釈できるのではないかと思われる。三仏齊詹卑国は三仏齊という地域の中の詹卑国(詹卑は通説ではジャンビ)、三仏齊注輦国は三仏齊という地域の中の注輦国ということである。注輦は通常は南インドのチョーラであるが、三仏齊注輦は東南アジアにおける言わばチョーラの出先勢力ということになる。

大食の場合も総称であることが無前提に明らかなわけではなく、問題の時期の史料に大食某々国という表現があつて初めて大食が総称であることが判明するのである。三仏齊が総称であることが認識されなかったのは、具体例が三仏齊詹卑と三仏齊注輦の二つしかなく、かつ後者が南インドの注輦(本国)と混同されたという特殊な事情によるものと思われる。

こうした三仏齊=総称説に立つならば、従来三仏齊=シュリーヴィジャヤとして再構成されてきたこの地域の10世紀から15世紀にかけての歴史は全面的に再検討する必要があると考えられる。

「阮氏治下(16-18世紀)の『公田』と将臣・社長について —— ベトナム中部の「社」について考察するために ——

後藤尚子

ベトナムの村落=社は、既に19世紀から、ベトナムの社会構造を理解する上で鍵であるとして注目されてきた。19世紀の公田=村落共有田の社による自律的な管理は、その特徴の一つとされ、村落の自律化は、15世紀には国有田であった公田の村落共有田化に平行して成立するものと理解されている。それに伴って、村落の長は、知県による選任か

ら、村落内で選ばれたものの王朝による追認へと変化したという。

このようなベトナム村落についての歴史的理解は、主にベトナム北部に関する研究によるものである。しかしベトナム中部地域では、大きくこれとは異なる状況が見られた。黎朝洪徳均田例は順化、広南の二處には施行されてはいなかったが、既に「公田」は存在し、「公田」中には私墾田が混在していたと思われる。阮氏統治の初期から既に私墾田耕作者による「公田」の占耕が問題となっていた。1669年、太宗二十一年令により検田・田土の等級わけ・定額租の設定等が行われた際、「公田」と「私田」は明確に区別される。そして、「公田」は「本社に還」され、「私田」は「本社」が「分争するを得」ないことが明示された。

この「公田」の分給に関する『撫辺雜錄』の記録は、黎朝洪徳均田例とは大きく違っている。「公田」の検地、田簿作成は太宗二十一年令以降阮氏の手によっては行われることなく、「公田」分給のための『均給公田簿』は村落内にあって、洪徳均田例のように「公田」分給に関する諸業務のために律令体制下の官である県官が派遣されるようなことはなかった。又、洪徳均田例におけるように「公田」が官員の奉祿田として分給されるようなことは全くなく、「均給等階表」に類するものは記録に残っていない。

おそらく、「本社へ還す」という表現からも推測されるように、「公田」は既に村落に所属する田であり、村落内で自律的に分給が行われていたと思われる。このような状況は、阮氏治下における「民の便に従いて邑を立て、開耕・納税するを聽す。各の官吏を設け以って之を徵収す。」、即ち「立村開墾」という状況と不可分の関係にあったと考えられる。特に広南處における村落数の増加は著しいが、共同で村落地の開墾を行った人々は、自分達の開墾した土地は自分達のものであるという考え方、即ち、開墾地と開墾者との一体観念により、村落の開墾地＝「公田」を自らの手で管理したのである。

このような村落の長、と言うよりはむしろ支配層であったと考えられる将臣と社長は、漸く1707年に至りその定員について阮氏の側から統制が加えられるようになるが、それまでは全く村落側の自由に任せられていたようである。村落内で将臣・社長となった者達は、おそらく「立村開墾」において指導的役割をはたした者達と関係があろう。例えば、これは特殊な例ではあるが、1648年に鄭氏の捕虜に立村開墾させた際、彼らに粟を貸した「富家」と開墾民との間には、「貸粟」という行為を通して人格的上下関係が成立したはずである。当時既に、丁税を課すための閲選においては、民丁の実態によるのではなく割合による各項への選別がみられ、かつ、村落=社は「公田」租や丁税の徵集において共同責任を負わされる単位であったが、そればかりでなく、徵兵についても、将臣・社長を代表とする社に共同責任が負わされていた。「立村開墾」において指導的役割をはたし、その地位についた将臣・社長は、『均給公田簿』・『差餘脚米簿』を手中に收め、村落内の顔役として、社としてのこれらの責務をはたすための采配をふるったであろう。

ところが1725年に至り、阮氏は将臣・社長から禮例を徵収することを定め、阮氏中央への捐納によりその地位が認められるようになる。その結果、将臣・社長になり得るか否かということは捐納をし得るか否かということによって決定されるようになり、将臣・社長の性格がこれまでとは変わってくる。阮氏はこれによって在地勢力を体制内に取り込もうとし、将臣・社長を末端徵税吏として位置づけ、彼らを通して村落を把握しようとしたのであった。

インドネシアの「紅はこべ」論 一大衆文学論へのこころみー

押川典昭

インドネシアの革命家タン・マラカ (Tan Malaka, 1897-1949) は、20余年の国外亡命の後、独立革命期のインドネシアに忽然と再登場し、1920年代の輝ける指導者、伝説の革命家として、大衆的な人気をもって迎えられた。この時彼はしばしば、「空を飛び」また「自由に姿を消す」ことのできる超能力を持った神秘的な人物と考えられ、その卓抜な革命理論とあいまって、急進派のシンボル的存在となった。本報告は、こうした「タン・マラカ伝説」が生まれた秘密の一端を、植民地末期に広く読まれた大衆小説『インドネシアの紅はこべ』シリーズの中に探り、同時にそのことを通して、従来のインドネシア文学研究において「低俗なもの」と斥けられてきた大衆文学の意味と可能性を、考察しようとするものである。

バロネス・オルツィの有名な冒険小説『紅はこべ』を翻案した『インドネシアの紅はこべ』は、1938年から40年にかけ、スマトラのメダンで2人の作者によって全部で5冊出版された。題名は(1)『諜報機関（インドネシアの紅はこべ）』、(2)『インドネシアの紅はこべ一味の役割』、(3)『祖国の呼び声』、(4)『泥にまみれた真珠—〈紅はこべ〉三たび救出に現わる』、(5)『紅はこべ祖国に帰る』。作者は(1)(2)(3)がMata Mona、(4)(5)がYusdjaであるが、この2人は植民地末期にメダンを中心に普及したマレー語大衆娯楽小説、いわゆる「ロマン・ピチサン」(roman picisan)の書き手として知られる。「ロマン・ピチサン」とは「円本」ないし“dime novel”を意味し、19世紀末から出版市場に現れた西欧・中国の翻訳小説と翻案小説、実録小説（「ニヤイ小説」、「悪漢小説」）、そして1920年代以降の華人による大衆文芸誌の普及を前史として誕生した、一種の冒険小説、探偵小説、伝奇小説のことである。

『紅はこべ』シリーズの白眉は(1)(2)で、これは1920年代に植民地政府によって祖国を追放されたインドネシアの実在（小説では変名）のナショナリストたちが、帝国主義とスターリニズム相手に神出鬼没の闘いをくりひろげながら、祖国の解放をめざすという物語である。彼らの領袖であるヒーロー〈紅はこべ〉が誰かは明らかにされないが、その人物描写、状況設定などからこれがタン・マラカであることは、読者には容易に了解される仕掛けになっている。〈紅はこべ〉は“ilmu gaib”と呼ばれる幻術（己の姿を消せる）を用い、また勇気と知略をもって、同志を窮地から救い出し、敵の包囲網を巧みにくぐり抜け。こうした超能力者としての〈紅はこべ〉＝タン・マラカの活躍は、もちろんフィクションであるが、やがて虚構の枠をとび出して、同時代のインドネシアの新聞紙上にもたびたび登場するようになり、彼の神秘性を高めた。

この政治冒険小説の特色は、さしあたり次の2つを指摘できる。第1は「情報性」ないし「記録性」。これは、小説の背景をなす1930年代の世界政治（帝国主義、ファシズム、スターリニズム）の動向を描くことによって、インドネシアを取り巻く同時代の情報を読者に提供し、またそれらと戦うためのノウハウ（変装術、尾行のまき方、地下宣伝工作の方法など）を提供することである。第2は〈紅はこべ〉と同志たちの友情を通して描かれる「ユートピア小説」としての性格。言い換えればこれは、現実の彼方にある世界へと通

じる「自由の翼」を読者に与え、現実では成し得ないこと（夢）を虚構において読者に体験させる（この意味で、〈紅はこべ〉の“ilmu gaib”は「ラスコリニコフの斧」の役割を果たす）、ということである。

インドネシアの大衆文学は、これまで文学史を飾ってきた近代文学が主題とした封建的諸制度と近代的自我の葛藤、男女の自由恋愛を描かないが故に等閑視されてきた。しかしその成立と発展、そこに描かれた「革命」や「政治」の意味、そしてそこに投影された同時代の人々の夢の在り処を探ると、我々に豊かな世界を提供してくれるであろう。

東南アジアのエスニシティ論と国民国家 — 民族主義と国民主義について —

綾部恒雄

東南アジア地域の“民族”に関する文化人類学的研究は、文化史的民族学の成果を除くと、必ずしも豊富なものであるとはいえない。また、これまでの研究は伝統文化記述への傾斜が強く、文化人類学が到達しているエスニシティ論をも採りこんだ、今日的関心に応えうる成果に乏しい。1970年代より台頭してきたエスニシティ論は“民族”的問題を常に国家との関連において捉えている。国家との関連における“民族”とは、多くの場合、当該国家を構成する民族集団のことにはならない。民族集団とは「国民国家の枠組みの中で、他の同種の集団との相互行為的状況下に、出自と文化的アイデンティティを共有している人々による集団」のことである。こうした民族集団の表出的側面や特性がエスニシティとよばれるものである。

これまでの東南アジアに関する人類学的研究に、エスニシティ論の視点が欠落していたということは、必然的に、権力とその支配機構としての近代国家の成立と、これに先立つ入的集団、つまり国民国家と民族集団との関係、西欧植民地支配とナショナリズムなどのような、政治社会論との交錯を可能にする問題意識の欠落をも意味していた。東南アジア地域に居住する民族集団は、どのようにナショナリズムの形成と関わり、第二次大戦後の植民地の相次ぐ独立、新興国の国民国家形成への志向という変動のなかで、その多元的エスニシティをいかに顕現させてきたか、といった類の人類学的研究は皆無に近いといえよう。

したがって、東南アジアに生起するきわめて多元的な民族集団の特色を、国民国家との関連のなかで捉えなおすことは、当地域における「ひと」と「くに」との成り立ちという空白の部分を、多少なりとも埋めるという意義を有しているといえよう。たとえば東南アジア諸国におけるナショナリズムの展開を考察するときには、多くの場合、エスニシティ論は“民族主義”という言葉の使用を否定する方向へ働く。エスニシティ論は、普遍主義を装った強者。マジョリティの論理に対して、平等主義を背景とした弱者・マイノリティの論理として登場してきたものだからである。発展途上国のナショナリズムは、その多くが当事国を代表する優位民族中のエリートによって担われたものであったが、イデオロギーとしては、特定優位民族の文化や言語に関する自己形成を目指して、国民国家としての宗主国（日本）の植民政策に対抗したものではなかった。たとえば、フィリピンやインドネシアに

じる「自由の翼」を読者に与え、現実では成し得ないこと（夢）を虚構において読者に体験させる（この意味で、〈紅はこべ〉の“ilmu gaib”は「ラスコリニコフの斧」の役割を果たす）、ということである。

インドネシアの大衆文学は、これまで文学史を飾ってきた近代文学が主題とした封建的諸制度と近代的自我の葛藤、男女の自由恋愛を描かないが故に等閑視されてきた。しかしその成立と発展、そこに描かれた「革命」や「政治」の意味、そしてそこに投影された同時代の人々の夢の在り処を探ると、我々に豊かな世界を提供してくれるであろう。

東南アジアのエスニシティ論と国民国家 — 民族主義と国民主義について —

綾部恒雄

東南アジア地域の“民族”に関する文化人類学的研究は、文化史的民族学の成果を除くと、必ずしも豊富なものであるとはいえない。また、これまでの研究は伝統文化記述への傾斜が強く、文化人類学が到達しているエスニシティ論をも採りこんだ、今日的関心に応えうる成果に乏しい。1970年代より台頭してきたエスニシティ論は“民族”的問題を常に国家との関連において捉えている。国家との関連における“民族”とは、多くの場合、当該国家を構成する民族集団のことにはならない。民族集団とは「国民国家の枠組みの中で、他の同種の集団との相互行為的状況下に、出自と文化的アイデンティティを共有している人々による集団」のことである。こうした民族集団の表出的側面や特性がエスニシティとよばれるものである。

これまでの東南アジアに関する人類学的研究に、エスニシティ論の視点が欠落していたということは、必然的に、権力とその支配機構としての近代国家の成立と、これに先立つ入的集団、つまり国民国家と民族集団との関係、西欧植民地支配とナショナリズムなどのような、政治社会論との交錯を可能にする問題意識の欠落をも意味していた。東南アジア地域に居住する民族集団は、どのようにナショナリズムの形成と関わり、第二次大戦後の植民地の相次ぐ独立、新興国の国民国家形成への志向という変動のなかで、その多元的エスニシティをいかに顕現させてきたか、といった類の人類学的研究は皆無に近いといえよう。

したがって、東南アジアに生起するきわめて多元的な民族集団の特色を、国民国家との関連のなかで捉えなおすことは、当地域における「ひと」と「くに」との成り立ちという空白の部分を、多少なりとも埋めるという意義を有しているといえよう。たとえば東南アジア諸国におけるナショナリズムの展開を考察するときには、多くの場合、エスニシティ論は“民族主義”という言葉の使用を否定する方向へ働く。エスニシティ論は、普遍主義を装った強者。マジョリティの論理に対して、平等主義を背景とした弱者・マイノリティの論理として登場してきたものだからである。発展途上国のナショナリズムは、その多くが当事国を代表する優位民族中のエリートによって担われたものであったが、イデオロギーとしては、特定優位民族の文化や言語に関する自己形成を目指して、国民国家としての宗主国（日本）の植民政策に対抗したものではなかった。たとえば、フィリピンやインドネシアに

おけるナショナリズムは、国民国家としてのスペインやオランダの外延としての植民地フィリピンや植民地インドネシアにおける植民地原住民の解放運動であり、特定の民族集団にもとづく民族主義の展開ではなかった。タガログ民族主義やジャワ民族主義が存在していたことは事実であるが、これらの民族主義は独立運動の展開のなかで、国民主義へと転換していくのである。フィリピン人やインドネシア人は、何千という民族集団によって構成されており、フィリピン民族、インドネシア民族という実体は存在しない。インドネシアには、各種の民族集団を横切るマレー文化の基盤はあったが、これは共通のカテゴリーとしてのマレー文化が存在していたということであり、民族とは異なるものである。したがって、これらの地域におけるナショナリズムとは、スペインやオランダによって植民地化されるという共通の歴史的運命によって結ばれた原住民が、“国民”的なイメージを形成して、自らの国民国家を実現しようとする運動ということになる。この場合のナショナリズムには民族主義という言葉が用いられるべきでなく、「国民主義」という言葉が用いられるべきものであろう。東南アジア諸国におけるエスニシティの性格を明らかにすることは、当地域を構成する諸国の多くが、民族主義によって国民国家への道を歩んだのではなくて、国民主義によって、国際システムの一環としての、国民国家を形成していったことを明らかにすることであろう。

《共通論題：日本における東南アジア史研究の総括と課題》

——フィリピン——

早瀬晋三

日本におけるフィリピン歴史学研究の歴史は、無論、世界におけるフィリピン歴史学研究や日本におけるフィリピン研究の歴史と無縁ではない。前回の共通論題「<地域研究>の成果と展望」でフィリピン研究が取り上げられなかつたこともあり、本報告では、世界におけるフィリピン歴史学研究および日本におけるフィリピン研究の歴史を概観した上で、日本におけるフィリピン歴史学研究について論議したい。

世界におけるフィリピン歴史学研究は、近年、大きく分けて二つの問題に関わっている。一つは、19世紀後半から20世紀初頭にかけて本格的に世界経済に巻き込まれたフィリピン社会の変化の過程を、アーネル学派の社会史、「従属理論」や「資本主義的世界システム論」を枠組みとして分析した地方史研究である。今一つは、フィリピン歴史学研究の最大の課題であるフィリピン革命を、革命の源流となつたフィリピン人の精神世界に踏み込んで分析した研究である。これらの研究では、ただ単に、歴史的事象を扱っているだけでなく、現在のフィリピンが抱えている問題の歴史的源流を探る試みもなされている。

現在、フィリピン歴史学研究が抱えている問題の一つに、データとディシプリンの問題がある。フィリピン地方史研究者の古文書漁りはかなりのレベルまで達し、20を越える古文書館で史料の発掘・収集を行つた研究者もいれば、集落という最小単位で事例研究を行つた者もいる。しかし、これらの事例研究が果たして、説得力を持つだけのディシプリンを備えているかどうか疑問が持たれている。一方、理論面の研究では、社会史研究共通の

おけるナショナリズムは、国民国家としてのスペインやオランダの外延としての植民地フィリピンや植民地インドネシアにおける植民地原住民の解放運動であり、特定の民族集団にもとづく民族主義の展開ではなかった。タガログ民族主義やジャワ民族主義が存在していたことは事実であるが、これらの民族主義は独立運動の展開のなかで、国民主義へと転換していくのである。フィリピン人やインドネシア人は、何千という民族集団によって構成されており、フィリピン民族、インドネシア民族という実体は存在しない。インドネシアには、各種の民族集団を横切るマレー文化の基盤はあったが、これは共通のカテゴリーとしてのマレー文化が存在していたということであり、民族とは異なるものである。したがって、これらの地域におけるナショナリズムとは、スペインやオランダによって植民地化されるという共通の歴史的運命によって結ばれた原住民が、“国民”的なイメージを形成して、自らの国民国家を実現しようとする運動ということになる。この場合のナショナリズムには民族主義という言葉が用いられるべきでなく、「国民主義」という言葉が用いられるべきものであろう。東南アジア諸国におけるエスニシティの性格を明らかにすることは、当地域を構成する諸国の多くが、民族主義によって国民国家への道を歩んだのではなくて、国民主義によって、国際システムの一環としての、国民国家を形成していったことを明らかにすることであろう。

《共通論題：日本における東南アジア史研究の総括と課題》

——フィリピン——

早瀬晋三

日本におけるフィリピン歴史学研究の歴史は、無論、世界におけるフィリピン歴史学研究や日本におけるフィリピン研究の歴史と無縁ではない。前回の共通論題「<地域研究>の成果と展望」でフィリピン研究が取り上げられなかつたこともあり、本報告では、世界におけるフィリピン歴史学研究および日本におけるフィリピン研究の歴史を概観した上で、日本におけるフィリピン歴史学研究について論議したい。

世界におけるフィリピン歴史学研究は、近年、大きく分けて二つの問題に関わっている。一つは、19世紀後半から20世紀初頭にかけて本格的に世界経済に巻き込まれたフィリピン社会の変化の過程を、アーネル学派の社会史、「従属理論」や「資本主義的世界システム論」を枠組みとして分析した地方史研究である。今一つは、フィリピン歴史学研究の最大の課題であるフィリピン革命を、革命の源流となつたフィリピン人の精神世界に踏み込んで分析した研究である。これらの研究では、ただ単に、歴史的事象を扱っているだけでなく、現在のフィリピンが抱えている問題の歴史的源流を探る試みもなされている。

現在、フィリピン歴史学研究が抱えている問題の一つに、データとディシプリンの問題がある。フィリピン地方史研究者の古文書漁りはかなりのレベルまで達し、20を越える古文書館で史料の発掘・収集を行つた研究者もいれば、集落という最小単位で事例研究を行つた者もいる。しかし、これらの事例研究が果たして、説得力を持つだけのディシプリンを備えているかどうか疑問が持たれている。一方、理論面の研究では、社会史研究共通の

問題である比較研究が充分行われているとはいはず、一般理論化への障害となっている。今後、南部のイスラム教徒社会や山地アニミスト社会をも射程にいれた地方史研究や、低地キリスト教徒間の差異をも考慮にいれたエスニシティやアイデンティティの問題を念頭に置いた研究も必要となってくる。また、ディシプリンやフィリピン共和国という近代国家の枠を越えた地域の研究や国際的な比較研究も必要である。フィリピンの特殊事情としては、植民地政府主導によるフィリピン研究の土台がなく、批判すべき、また、利用すべき学風がないこと、フィリピンを事例研究とし、他地域にも影響を及ぼすような理論研究が少ないことも問題点として指摘できる。

日本における本格的なフィリピン研究は、学術研究の規制がないことや地域的にも階層的にも広く英語が通用することから、農村調査や人類学調査が活発に行われた。歴史学研究においてもその影響がみられる。また、周辺分野の歴史学研究への貢献も無視できない。歴史学研究は量において活発であるとはいいい難いが、世界におけるフィリピン歴史学研究の流れと平行した、あるいは、影響を受けた研究が発表され、精力的に研究が進められている。日本におけるフィリピン歴史学研究の最大の問題は、研究者の数が少ないとことで、日本人フィリピン歴史学研究者の間で、嗜み合った議論がなかなかできることである。その意味でも、日本における正規の教育・研究機関において確固たる若手研究者の育成が待たれる。日本人研究者として、フィリピン歴史学研究を考えた場合、日比関係史を無視するわけにはいかない。近年、フィリピンの原史料を使い、口述史料も収集した研究成果がでてきていていることは評価できる。その他、日本資本主義史研究や日本における中国研究の蓄積に基づいた研究も、日本人研究者として貢献できる分野である。最後に、近年、フィリピンに関する報道や社会問題に関する情報が多いのに比べ、研究・教育環境が貧弱な点を指摘しておく必要があろう。

— インドネシア — — 歴史像の構築へ向けて —

大橋厚子

本報告では、日本における研究法の特色について概観した。

1960年代初めにスタートした日本のインドネシア史研究は、研究開始後20年余で欧米における研究の模倣の域を脱し、独自の方法に立脚した精緻な研究成果をあげ得るレベルに到達した。この「高度成長」は、戦前および敗戦直後の日本において生み出された完成度の高い歴史研究の方法が、インドネシア史研究に応用されたことによって可能となったと考えられる。

このことが最も明らかであるのは、近代史中の社会経済史の分野である。日本人研究者は、1)欧米人研究者と同様にオランダ語史料を利用しながらも、2)「大塚史学」。マルクス主義史学などの歴史觀および分析概念を適用することによって、3)農民層分解・資本蓄積などの問題について、4)明確な歴史觀に裏付けられ、かつ緻密さにおいて欧米のレベルを抜く諸成果を生み出した。また西洋史・国史・中国史などと共通の分析概念が使用されたことによって、これらの地域とインドネシアの社会経済史の比較が可能となった。

問題である比較研究が充分行われているとはいはず、一般理論化への障害となっている。今後、南部のイスラム教徒社会や山地アニミスト社会をも射程にいれた地方史研究や、低地キリスト教徒間の差異をも考慮にいれたエスニシティやアイデンティティの問題を念頭に置いた研究も必要となってくる。また、ディシプリンやフィリピン共和国という近代国家の枠を越えた地域の研究や国際的な比較研究も必要である。フィリピンの特殊事情としては、植民地政府主導によるフィリピン研究の土台がなく、批判すべき、また、利用すべき学風がないこと、フィリピンを事例研究とし、他地域にも影響を及ぼすような理論研究が少ないことも問題点として指摘できる。

日本における本格的なフィリピン研究は、学術研究の規制がないことや地域的にも階層的にも広く英語が通用することから、農村調査や人類学調査が活発に行われた。歴史学研究においてもその影響がみられる。また、周辺分野の歴史学研究への貢献も無視できない。歴史学研究は量において活発であるとはいいい難いが、世界におけるフィリピン歴史学研究の流れと平行した、あるいは、影響を受けた研究が発表され、精力的に研究が進められている。日本におけるフィリピン歴史学研究の最大の問題は、研究者の数が少ないとことで、日本人フィリピン歴史学研究者の間で、嗜み合った議論がなかなかできることである。その意味でも、日本における正規の教育・研究機関において確固たる若手研究者の育成が待たれる。日本人研究者として、フィリピン歴史学研究を考えた場合、日比関係史を無視するわけにはいかない。近年、フィリピンの原史料を使い、口述史料も収集した研究成果がでてきていていることは評価できる。その他、日本資本主義史研究や日本における中国研究の蓄積に基づいた研究も、日本人研究者として貢献できる分野である。最後に、近年、フィリピンに関する報道や社会問題に関する情報が多いのに比べ、研究・教育環境が貧弱な点を指摘しておく必要があろう。

— インドネシア — — 歴史像の構築へ向けて —

大橋厚子

本報告では、日本における研究法の特色について概観した。

1960年代初めにスタートした日本のインドネシア史研究は、研究開始後20年余で欧米における研究の模倣の域を脱し、独自の方法に立脚した精緻な研究成果をあげ得るレベルに到達した。この「高度成長」は、戦前および敗戦直後の日本において生み出された完成度の高い歴史研究の方法が、インドネシア史研究に応用されたことによって可能となったと考えられる。

このことが最も明らかであるのは、近代史中の社会経済史の分野である。日本人研究者は、1)欧米人研究者と同様にオランダ語史料を利用しながらも、2)「大塚史学」。マルクス主義史学などの歴史觀および分析概念を適用することによって、3)農民層分解・資本蓄積などの問題について、4)明確な歴史觀に裏付けられ、かつ緻密さにおいて欧米のレベルを抜く諸成果を生み出した。また西洋史・国史・中国史などと共通の分析概念が使用されたことによって、これらの地域とインドネシアの社会経済史の比較が可能となった。

これに対して近代史の中でも政治史・政治思想史の分野では、研究法は研究者個人の独創性に負う部分が大きいように思われる。またアメリカの学風の影響も無視できない。しかし欧米の研究と比較するならば、日本人の研究には次のような傾向が認められる。日本人研究者は、政治過程そのものよりも政治思想の展開を研究対象とする。そしてその研究は、1)欧米人と同様にオランダ語および現地語史料を利用しつつも、2)史料に対して外在的な分析概念を使用するよりはテキストの丹念な読解によって、3)テキストに現われるひとつの観念、思想、あるいはひとつの政治・文化団体の発展の過程を、4)時間の経過に従って克明に跡付ける傾向にある。このアプローチは、日本において発達した政治史・思想史の方法に由来するものであると思われる。

また前近代史の分野は、未だ研究成果に乏しいが、1)漢文・サンスクリット語史料などを利用し、2)東洋史学において蓄えられた豊かな知識と実証的研究法とを応用した、3)地名比定・文献考証などの4)基礎研究の存在を、この分野の特色として指摘することができる。

しかし上述の研究方法にはひとつの重大な欠陥が存在する。それは、インドネシア史像の構築に必要な理論研究の欠落である。これまでの日本におけるインドネシア史研究は、様々なディシプリンに由来する研究方法をそれらに好適な時代と地域に応用することによって、モノグラフを生み出し続けてきた。ところがこれらの成果を相互に意味付け、かつこれらの成果と現代インドネシアとの関連を明らかにする理論の研究には、今日に至るまで手がつけられずに来た。この結果、歴史研究の最終目的である歴史叙述に於て、日本人研究者は独自の歴史像を提示できずに、いまなお欧米の成果を模倣する段階にあるのである。

このように歴史理論の研究は、今後の大きな課題である。とはいえる、歴史学における理論研究は個別実証研究を離れてはありえない。そこで今後我々がなすべき作業は、インドネシア史像の構築を最終目的とする視点にたって個別実証研究を積み重ねながら、これを踏まえた歴史像素描の試みを繰り返してゆくことであろう。この作業を実り多きものとするために今後研究の進展が期待される問題領域は、1)近現代インドネシアにおける社会変化の前提としての前近代における国家と社会、2)現代インドネシアのかかえる諸問題の歴史的形成過程の二領域である。

—ベトナム—

高田洋子

近代日本におけるベトナム研究の歴史は、その開始を1880年代にまで遡ることができる。世紀末の日本にとって、東アジアにおける欧米の動向は政治的関心の的であった。こうした時代的背景の下に、『安南史』の刊行や史書の翻刻・清仏戦争をめぐる研究などがすでに行われている。

戦前に仏印関係の書籍や翻訳が最も多く出版されたのは、1940年頃からの数年間である。フランス側の諸資料や研究を翻訳・利用したもの、資源調査、文化論、民族運動史などが次々に世に出た。それらの多くが「大東亜共栄圏」の思想とともにあったことは言うまでもない。今日、魅力ある研究上の成果を有する内容のものは少ない。

これに対して近代史の中でも政治史・政治思想史の分野では、研究法は研究者個人の独創性に負う部分が大きいように思われる。またアメリカの学風の影響も無視できない。しかし欧米の研究と比較するならば、日本人の研究には次のような傾向が認められる。日本人研究者は、政治過程そのものよりも政治思想の展開を研究対象とする。そしてその研究は、1)欧米人と同様にオランダ語および現地語史料を利用しつつも、2)史料に対して外在的な分析概念を使用するよりはテキストの丹念な読解によって、3)テキストに現われるひとつの観念、思想、あるいはひとつの政治・文化団体の発展の過程を、4)時間の経過に従って克明に跡付ける傾向にある。このアプローチは、日本において発達した政治史・思想史の方法に由来するものであると思われる。

また前近代史の分野は、未だ研究成果に乏しいが、1)漢文・サンスクリット語史料などを利用し、2)東洋史学において蓄えられた豊かな知識と実証的研究法とを応用した、3)地名比定・文献考証などの4)基礎研究の存在を、この分野の特色として指摘することができる。

しかし上述の研究方法にはひとつの重大な欠陥が存在する。それは、インドネシア史像の構築に必要な理論研究の欠落である。これまでの日本におけるインドネシア史研究は、様々なディシプリンに由来する研究方法をそれらに好適な時代と地域に応用することによって、モノグラフを生み出し続けてきた。ところがこれらの成果を相互に意味付け、かつこれらの成果と現代インドネシアとの関連を明らかにする理論の研究には、今日に至るまで手がつけられずに来た。この結果、歴史研究の最終目的である歴史叙述に於て、日本人研究者は独自の歴史像を提示できずに、いまなお欧米の成果を模倣する段階にあるのである。

このように歴史理論の研究は、今後の大きな課題である。とはいえる、歴史学における理論研究は個別実証研究を離れてはありえない。そこで今後我々がなすべき作業は、インドネシア史像の構築を最終目的とする視点にたって個別実証研究を積み重ねながら、これを踏まえた歴史像素描の試みを繰り返してゆくことであろう。この作業を実り多きものとするために今後研究の進展が期待される問題領域は、1)近現代インドネシアにおける社会変化の前提としての前近代における国家と社会、2)現代インドネシアのかかえる諸問題の歴史的形成過程の二領域である。

—ベトナム—

高田洋子

近代日本におけるベトナム研究の歴史は、その開始を1880年代にまで遡ることができる。世紀末の日本にとって、東アジアにおける欧米の動向は政治的関心の的であった。こうした時代的背景の下に、『安南史』の刊行や史書の翻刻・清仏戦争をめぐる研究などがすでに行われている。

戦前に仏印関係の書籍や翻訳が最も多く出版されたのは、1940年頃からの数年間である。フランス側の諸資料や研究を翻訳・利用したもの、資源調査、文化論、民族運動史などが次々に世に出た。それらの多くが「大東亜共栄圏」の思想とともにあったことは言うまでもない。今日、魅力ある研究上の成果を有する内容のものは少ない。

戦後のベトナム史研究を概観すると、とりわけ前近代史研究にオリジナルな研究が蓄積され、発展してきたといえる。それらの研究の特徴は、昭和の初期から戦中にかけての、「東洋史学」の一環としてあった学問的蓄積の上に展開していた点にある。その主要テーマは、ベトナム与中国の関係史、中国との家族制度・法律の比較研究、科挙、華僑等におかれ、それらは1970年代後半以降に集大成を見た。

ところで、1960年代後半からのベトナム戦争の展開は、様々な意味において日本のベトナム研究者に影響を与えた。なかつた。

まず60年代末にはベトナム戦争に関する史料集や、欧米人によるベトナム史の翻訳がさかんになった。戦争自体を扱ったジャーナリズムの出版物も多かったが、一方ではベトナム文学の翻訳紹介、ベトナム語を学ぶ場の開設、辞書の編纂などによって、新しいベトナム近現代史研究の生まれる素地がしだいにつくられていった。前近代史の領域においても、苛烈な人民戦争の抵抗基盤の探求という問題関心にそった研究方法が、模索され始めていた。

こうして70年代に入ると、前近代、近現代の両研究分野において、注目すべき進展がみられた。すなわち、日本においてもベトナム史全体を通じた村落共同体をめぐる議論が、独自の見解をもつ研究として深化したと同時に、民族運動の系譜、経済、思想、日本軍進駐期の諸問題についての個別実証研究の成果が発表されるようになった。

報告では、この最近20年間の日本におけるベトナム研究の新しい動向を概観する。しかしながら、報告者には様々な個別研究を網羅的に論じる時間も能力も持たれないと。そのため報告は自己の関心にそって、近代史（フランス植民地・日本軍進駐期）研究の諸問題を中心に論じることにしたい。それは報告者が、この時代をベトナム史の重要な結節点と考えていることと関係している。

あらゆる時代と場所に共通することではあるが、この時期の社会の特質を解明するには、問題を広く政治、経済、社会のそれぞれの側面から検討し、全体としての植民地体制を考察するよう試みなければならない。そのような視点から従来の研究諸成果を整理し、研究を推進する上で問題点と課題を考察することにしたい。

——タイ——

橋本 卓

タイ史研究には、常に資料不足と資料の難解性という隘路がつきまとう。しかし、これまでの研究を振り返ってみると、それらの障害にもかかわらず、多くの研究成果が蓄積されてきたことがわかる。本報告ではとくにラタナコーシン王朝以降を中心に、タイ歴史研究を概観するとともに、今後の課題と思われる点を指摘する。

アユタヤ時代から19世紀後半にいたるまでの統治・法制史および社会経済史を研究するうえで欠かせない重要な資料が「三印法典」である。同法典については（石井）による多くの紹介や研究があり、伝統的史書「ポンサーワダーン」および各種タイ語文献資料の紹介とともにタイ史研究に大きな影響を与えている。

19世紀から20世紀初頭にかけての社会経済史については、1855年のボーリング条約前後

戦後のベトナム史研究を概観すると、とりわけ前近代史研究にオリジナルな研究が蓄積され、発展してきたといえる。それらの研究の特徴は、昭和の初期から戦中にかけての、「東洋史学」の一環としてあった学問的蓄積の上に展開していた点にある。その主要テーマは、ベトナム与中国の関係史、中国との家族制度・法律の比較研究、科挙、華僑等におかれ、それらは1970年代後半以降に集大成を見た。

ところで、1960年代後半からのベトナム戦争の展開は、様々な意味において日本のベトナム研究者に影響を与えた。なかつた。

まず60年代末にはベトナム戦争に関する史料集や、欧米人によるベトナム史の翻訳がさかんになった。戦争自体を扱ったジャーナリズムの出版物も多かったが、一方ではベトナム文学の翻訳紹介、ベトナム語を学ぶ場の開設、辞書の編纂などによって、新しいベトナム近現代史研究の生まれる素地がしだいにつくられていった。前近代史の領域においても、苛烈な人民戦争の抵抗基盤の探求という問題関心にそった研究方法が、模索され始めていた。

こうして70年代に入ると、前近代、近現代の両研究分野において、注目すべき進展がみられた。すなわち、日本においてもベトナム史全体を通じた村落共同体をめぐる議論が、独自の見解をもつ研究として深化したと同時に、民族運動の系譜、経済、思想、日本軍進駐期の諸問題についての個別実証研究の成果が発表されるようになった。

報告では、この最近20年間の日本におけるベトナム研究の新しい動向を概観する。しかしながら、報告者には様々な個別研究を網羅的に論じる時間も能力も持たれないと。そのため報告は自己の関心にそって、近代史（フランス植民地・日本軍進駐期）研究の諸問題を中心に論じることにしたい。それは報告者が、この時代をベトナム史の重要な結節点と考えていることと関係している。

あらゆる時代と場所に共通することはあるが、この時期の社会の特質を解明するには、問題を広く政治、経済、社会のそれぞれの側面から検討し、全体としての植民地体制を考察するよう試みなければならない。そのような視点から従来の研究諸成果を整理し、研究を推進する上での問題点と課題を考察することにしたい。

——タイ——

橋本 卓

タイ史研究には、常に資料不足と資料の難解性という隘路がつきまとう。しかし、これまでの研究を振り返ってみると、それらの障害にもかかわらず、多くの研究成果が蓄積されてきたことがわかる。本報告ではとくにラタナコーシン王朝以降を中心に、タイ歴史研究を概観するとともに、今後の課題と思われる点を指摘する。

アユタヤ時代から19世紀後半にいたるまでの統治・法制史および社会経済史を研究するうえで欠かせない重要な資料が「三印法典」である。同法典については（石井）による多くの紹介や研究があり、伝統的史書「ポンサーワダーン」および各種タイ語文献資料の紹介とともにタイ史研究に大きな影響を与えている。

19世紀から20世紀初頭にかけての社会経済史については、1855年のボーリング条約前後

のチャオプラヤー・デルタにおける運河開発・土地制度史・徵税制度などが（友杉・田辺・北原）によって研究されてきた。また植民地勢力による外圧に関連して不平等条約（飯島）、近代化を支えた海外留学（赤木）の研究がある。

近代国家建設における国民形成に大きな役割を果たしたのがラーマ六世時の「ラク・タイ」原理の導入であり、民族・国王・仏教の不可分の関係を統合メディアとして重視している（矢野・石井）。ただこの点については、（村嶋）が19世紀末から「チャート」が民族的政治共同体概念としてすでに用いられていることを指摘している。

1932年には絶対王政下における近代化が立憲革命を招来することになるが、このタイ現代史の重要な転換点について（矢野）が詳しく分析し、（市川）も革命の立役者である留学経験者の視点からこの事件を考察している。第二次世界大戦前後のビブーンの政治、抗日運動、華僑問題については（市川・吉川）の研究が充実している。なおこの時期にいたるまでの日・タイ交渉史については、（吉川・西野）の研究がある。

戦後期においては政治史が中心となるが、とくにサリットの統治を「先祖帰り」として論じた（矢野）の研究が重要である。また「革命団布告」による特殊タイ的統治の分析、「共産主義者」としての異端分子の排斥論理の指摘が戦後タイ政治の理解を助けている。1973年10月14日政変前後の学生・農民運動の政治化については、すでに（北原・赤木・村嶋）の実証研究があるが、歴史的な評価は今後の問題となろう。

さて今後の課題については、従来の諸研究をより深めていくことのほか、以下のような視角を持った研究が望まれる。

(1)地方における社会史、経済史の研究。これはタイにおける歴史研究の新しい動きとも関連するものであり、従来の法律や公的な史料だけでなく、各地方・地域の文献資料や古老などの口述資料をもとに農民の生活史や世界観を掘りおこそうとするものである。このような傾向はすでに、農村社会調査の際にその土地の歴史をできるだけ遡っていこうとする試みに現われている。

(2)社会・政治変動を、開発（パタナー）、経済発展、工業化の歴史を跡づけることによって分析する。

(3)社会思想史、政治思想史の研究。最近タイ研究者によるこれらの分野のすぐれた研究が現れ、日本語に翻訳もされるようになってきた。

以上のような課題は従来の研究の隙間をうめるものであり、またそれらの研究をよりよく理解する材料を提供するものもある。

—ビルマ—

渡辺佳成

少數の先駆的研究者の精力的な活動によって担われてきた日本のビルマ史研究は、1970年代後半以降、その広がりと深まりを見せはじめ今日にいたっている。しかしながら、その研究を個々見ていくと、それ自体は貴重な研究成果を生み出しながらも、全体として一つのビルマ史像を描き出すには至っていない。本報告では、前近代史の研究に重点をおいてこれまでの研究を概観し、今後の課題とされる点を指摘してみたい。

のチャオプラヤー・デルタにおける運河開発・土地制度史・徵税制度などが（友杉・田辺・北原）によって研究されてきた。また植民地勢力による外圧に関連して不平等条約（飯島）、近代化を支えた海外留学（赤木）の研究がある。

近代国家建設における国民形成に大きな役割を果たしたのがラーマ六世時の「ラク・タイ」原理の導入であり、民族・国王・仏教の不可分の関係を統合メディアとして重視している（矢野・石井）。ただこの点については、（村嶋）が19世紀末から「チャート」が民族的政治共同体概念としてすでに用いられていることを指摘している。

1932年には絶対王政下における近代化が立憲革命を招来することになるが、このタイ現代史の重要な転換点について（矢野）が詳しく分析し、（市川）も革命の立役者である留学経験者の視点からこの事件を考察している。第二次世界大戦前後のビブーンの政治、抗日運動、華僑問題については（市川・吉川）の研究が充実している。なおこの時期にいたるまでの日・タイ交渉史については、（吉川・西野）の研究がある。

戦後期においては政治史が中心となるが、とくにサリットの統治を「先祖帰り」として論じた（矢野）の研究が重要である。また「革命団布告」による特殊タイ的統治の分析、「共産主義者」としての異端分子の排斥論理の指摘が戦後タイ政治の理解を助けている。1973年10月14日政変前後の学生・農民運動の政治化については、すでに（北原・赤木・村嶋）の実証研究があるが、歴史的な評価は今後の問題となろう。

さて今後の課題については、従来の諸研究をより深めていくことのほか、以下のような視角を持った研究が望まれる。

(1)地方における社会史、経済史の研究。これはタイにおける歴史研究の新しい動きとも関連するものであり、従来の法律や公的な史料だけでなく、各地方・地域の文献資料や古老などの口述資料をもとに農民の生活史や世界観を掘りおこそうとするものである。このような傾向はすでに、農村社会調査の際にその土地の歴史をできるだけ遡っていこうとする試みに現われている。

(2)社会・政治変動を、開発（パタナー）、経済発展、工業化の歴史を跡づけることによって分析する。

(3)社会思想史、政治思想史の研究。最近タイ研究者によるこれらの分野のすぐれた研究が現れ、日本語に翻訳もされるようになってきた。

以上のような課題は従来の研究の隙間をうめるものであり、またそれらの研究をよりよく理解する材料を提供するものもある。

—ビルマ—

渡辺佳成

少數の先駆的研究者の精力的な活動によって担われてきた日本のビルマ史研究は、1970年代後半以降、その広がりと深まりを見せはじめ今日にいたっている。しかしながら、その研究を個々見ていくと、それ自体は貴重な研究成果を生み出しながらも、全体として一つのビルマ史像を描き出すには至っていない。本報告では、前近代史の研究に重点をおいてこれまでの研究を概観し、今後の課題とされる点を指摘してみたい。

前近代史の研究においては、漢籍史料を用いた地名比定の研究が60年代前半までの主流を占めていた。また、その延長線上に中国との交渉史の研究がある。これらの研究は、その史料の性格上、中国史に立脚するか交渉自体に関心の目が向けられ、ビルマ史をいかに構築していくかの視点に欠けるきらいがあると言わざるをえない。したがって、最近の研究においては、漢籍史料を用いた研究自体が看過されがちであるが、日本人のビルマ史研究への貢献とすることを考えた場合、まだまだ未開拓の分野が、あるいは再検討しうる分野が残されているものと思われる。そのことを如実に示したのが、鈴木中正・荻原弘明両氏による「貴家宮裡雁と清緬戦争」であり、鈴木氏の清緬関係に関する一連の論稿である。このことは、前近代史の研究のもう一つの主流である欧米諸国との交流史の研究にも当てはまる。やはり、交渉自体にその研究の主眼がおかれており、今後は、その交渉がビルマの各王朝の国家構造、経済構造にとって如何なる意味を持っていたのか、そして、その与えた影響によってどのような変容をとげたのかを、視点に据えた研究が必要となってくるものと思われる。

前近代史研究においては、以上のような研究とともに、荻原氏のマンナン・ヤーザウインの訳注に代表されるように、ビルマ語史料を用いた研究が、その初期の段階からなされており、貴重な研究成果が蓄積されてきた。しかし、それは一つのモノグラフにとどまり、王朝時代の支配構造全体や各王朝の変遷のダイナミズムをうかがわせるものとはなっていない。こうした中で、奥平龍二氏による一連の法制史研究が、王朝時代の支配構造全体を考える上で重要な意味を持つてくるものと思われる。また、社会経済史的観点からなされた大野徹・齊藤照子・伊東利勝氏らによる研究も、末端における支配構造を考える上で貴重な示唆を含んでいる。今後、これらの成果をふまえながら、王権のありかた、具体的な支配装置の問題、そしてそれらが連関し合いながら構築されていく王朝の姿というものを追求していく研究が必要となっていくだろう。王権の概念については、仏教との関係が重要であるが、そうした意味において生野善応・池田正隆氏らの仏教史研究も今後の発展が期待される。また、王朝の変遷のダイナミズムの問題においては、その支配装置自体が内包する矛盾以外に、ビルマ史におけるビルマ族以外の民族の歴史、貿易をも含む経済構造などについての研究の深化が必要となってくると考えている。

近現代史の研究においては、イギリスに対する民衆反乱に関する研究と下ビルマデルタ開発に伴う諸事象に関する社会経済史研究に、その関心領域が集中している。民衆運動の研究では、従来、サヤー・サン反乱に限られていた中で、研究対象の広がりと民衆の信仰体系という新たな枠組みを提示した伊東氏の研究が注目される。また、これと関連して、伊野氏も指摘している如く、民衆運動に参加していった民衆の意識の問題に関する研究が、今後の課題となってくるだろう。一方、社会経済史の分野では、植民地政府の資料に基いた多くの研究成果が発表されてきたが、今後、地域性・時代性をふまえた議論の展開が期待される。これらの質量ともに豊富な研究領域に対して、民族主義運動に関する研究は、その蓄積が浅いと言わざるをえない。今後、運動の事実関係を明らかにしていくとともに、運動を担ってきた人々、参加していった人々の内面世界をも明らかにしていく研究が必要であると思われる。また、日本の軍政を含めた植民地支配の構造に関する研究の必要性が痛感される。

以上、一国史としてのビルマ史研究の成果と課題について概観してきたが、最後に、よ

りミクロな観点よりする地方史研究と、マクロな観点よりする東南アジアの中のビルマ、世界史の中のビルマ史研究の必要性について考えてみたい。ビルマ史を構築していくとき、はたして、ビルマ族の歴史であっていいのかという問題が常につきまとう。特に前近代を研究する際、いわゆる統一国家の時期は限られており、分裂の時代における各民族、各地方の歴史を研究していくことが必要である。そして、それは又、統一の時期を考えていく上でも重要な示唆を与えるはずである。一方、他の東南アジア諸国との比較研究において、それらの国々との間に見いだされる共通性と、ビルマのみが持つ独自性を考えていくことの重要性は指摘するまでもないだろう。ただ、見落とされがちな視点として、スリランカ・インドなどの南アジア史の中でビルマを考えいく研究が必要であることを指摘しておきたい。

— 雲南 —

—これまでの雲南史研究の展開と今後の課題—

栗原 悟

雲南はこれまで東南アジア史研究の一環としてしばしば重要視されてきた研究領域であるが、その研究上の位置づけはまだ不明瞭の觀がある。それはいろいろな理由によるものだが、一つには雲南史それ自体の枠組み並びに体系的な研究が充分とはいえず、更に「東南アジア世界」といかに関わってきたのかという観点からの積極的なアプローチもこれまで少かったように思われる。

これまでの雲南史研究の主なるテーマは、古来、同地方に勃興した諸部族・諸王国の史的動向とその政治権力基盤の実態解明を旨とし、従ってまず同地方に複雑錯綜として分布する種族＝民族集団(Ethnic Group)の実態把握とその史的考察、所謂民族史研究が展開してきた。中でも白鳥芳郎・藤沢義美・牧野巽等諸氏による南詔王国の形成とその民族構成並びにその王国組織に関する研究は周知の如くである。又、元朝の大理国(後理国)征服とその崩壊は大陸東南アジア諸民族国家の形成を考える上で重要とされているが、それを契機に勃興する土侯国(特にタイ系諸民族)の史的動向や、その一方で、中国の領域内に編入、従属させられる過程(例えば土司制度)の中で、いかに地域的な権力構造が形成されていったかという問題関心から各地の土司社会の形成とその政治社会組織・統治体系などに関する研究がなされてきた。

さて、今後の雲南史研究の課題は多く、多方面にわたると考えられるが、これまでの研究成果を踏まえ、更に近年の雲南における研究動向にも注目しながら、ここでは「東南アジア世界」とのかかわりから今後の課題として以下いくつかの点を考えてみたい。

近年、雲南において各方面の研究が徐々に活発化してきているが、まずその研究成果の一部として、農業地理をはじめ生態系に関する資料(書籍)が公にされている。中でも、報告者が興味を引くのは、雲南(省)全域で84%が山地、10%が高原であるのに対し、その6%が『壩子(バーツ)』と呼ばれる山間盆地(河谷平野も含む)であるという点である。雲南全域で大小あわせて1,400以上もあるといわれる『壩子』の類型は、雲南内地の地域性を浮きぼりにしてくれるばかりではなく、これまで大陸東南アジア、特にタイ系民族

りミクロな観点よりする地方史研究と、マクロな観点よりする東南アジアの中のビルマ、世界史の中のビルマ史研究の必要性について考えてみたい。ビルマ史を構築していくとき、はたして、ビルマ族の歴史であっていいのかという問題が常につきまとう。特に前近代を研究する際、いわゆる統一国家の時期は限られており、分裂の時代における各民族、各地方の歴史を研究していくことが必要である。そして、それは又、統一の時期を考えていく上でも重要な示唆を与えるはずである。一方、他の東南アジア諸国との比較研究において、それらの国々との間に見いだされる共通性と、ビルマのみが持つ独自性を考えていくことの重要性は指摘するまでもないだろう。ただ、見落とされがちな視点として、スリランカ・インドなどの南アジア史の中でビルマを考えいく研究が必要であることを指摘しておきたい。

— 雲南 —

—これまでの雲南史研究の展開と今後の課題—

栗原 悟

雲南はこれまで東南アジア史研究の一環としてしばしば重要視されてきた研究領域であるが、その研究上の位置づけはまだ不明瞭の觀がある。それはいろいろな理由によるものだが、一つには雲南史それ自体の枠組み並びに体系的な研究が充分とはいえず、更に「東南アジア世界」といかに関わってきたのかという観点からの積極的なアプローチもこれまで少かったように思われる。

これまでの雲南史研究の主なるテーマは、古来、同地方に勃興した諸部族・諸王国の史的動向とその政治権力基盤の実態解明を旨とし、従ってまず同地方に複雑錯綜として分布する種族＝民族集団(Ethnic Group)の実態把握とその史的考察、所謂民族史研究が展開してきた。中でも白鳥芳郎・藤沢義美・牧野巽等諸氏による南詔王国の形成とその民族構成並びにその王国組織に関する研究は周知の如くである。又、元朝の大理国(後理国)征服とその崩壊は大陸東南アジア諸民族国家の形成を考える上で重要とされているが、それを契機に勃興する土侯国(特にタイ系諸民族)の史的動向や、その一方で、中国の領域内に編入、従属させられる過程(例えば土司制度)の中で、いかに地域的な権力構造が形成されていったかという問題関心から各地の土司社会の形成とその政治社会組織・統治体系などに関する研究がなされてきた。

さて、今後の雲南史研究の課題は多く、多方面にわたると考えられるが、これまでの研究成果を踏まえ、更に近年の雲南における研究動向にも注目しながら、ここでは「東南アジア世界」とのかかわりから今後の課題として以下いくつかの点を考えてみたい。

近年、雲南において各方面の研究が徐々に活発化してきているが、まずその研究成果の一部として、農業地理をはじめ生態系に関する資料(書籍)が公にされている。中でも、報告者が興味を引くのは、雲南(省)全域で84%が山地、10%が高原であるのに対し、その6%が『壩子(バーツ)』と呼ばれる山間盆地(河谷平野も含む)であるという点である。雲南全域で大小あわせて1,400以上もあるといわれる『壩子』の類型は、雲南内地の地域性を浮きぼりにしてくれるばかりではなく、これまで大陸東南アジア、特にタイ系民族

研究者に問題にされてきた「ムアン」との比較研究の可能性を提示している。南詔・大理王国をはじめ諸民族国家の勃興がやはりこの『壩子』上に展開する水利灌漑の発達による農業生産力の発展に深いかかわりをもつとするならば、これまで問題にされてきた、例えばSip Song Panna王国の水利灌漑と王権の問題を手がかりに、更に昆明・大理をはじめとする規模の大きい『壩子』での水利灌漑の発達と中国国家権力の関与等について比較検討してみる必要があるだろう。

更に、これら『壩子』は交易のための要衝という機能をもっていたという点の解明も重要課題である。例えば、「博南古道」（雲南・ビルマルート）、「歩頭路」、「馬援故道」「邕州博馬道」等は中国と南海を結ぶ重要な交易ルートであったが、その時代的開発に伴い、いかに各『壩子』を結節点としながら地域的交易圏が形成されていったのか、更に遠隔地交易の発達に伴い、終着点として昆明・大理が所謂「ターミナル」化し、中国内地経済と連結していたのか。また、この交易によってもたらされた物産が多いが、なかでも貝（子安貝）は古くより雲南地方では貨幣として用いられた。近年、方国瑜氏は「雲南用貝作貨幣的時代及貝的来源」（『雲南社会科学』1981年1期）なる論文で、漢籍資料よりこの子安貝の原産地をベンガル湾とタイ湾に想定し、九世紀中期頃より十七世紀中期頃まで盛行しつづけた貝貨の衰退の原因を元明以降の内地化による貨幣統一政策の強制よりも、むしろ歐米列強の南海における植民地支配によって貝がもたらされずに衰退していった過程を明らかにしている。これは中国の政治支配のすすむなかで、むしろ経済、特に交易上にあっては、雲南と「東南アジア世界」とは密接な関係を有していたことを示唆し注目される。ところで、石井米雄・桜井由躬雄両氏は、このような雲南に出現した諸国家を「東南アジア世界」の形成から内陸性の「駅市国家」と呼んでいるが（『東南アジア世界の形成』講談社 1985年 p.53）、山地経済をもとり込んだ『壩子』内外の経済圏・商業圏に関する研究が今後詳細になされるならば、よりその実態の検証がなされるものと思われる。また、『馬帮（マバン）』とよばれる交易者組織のネットワークに関する実態研究も重要な課題の一つであろう。

さて、このような農業発達の拠点と交易の要衝という側面をもつ『壩子』に割拠した部族（国家）の有力なものが、中国から王権を賦与され、周囲の小部族（国家）に対していかに支配権を確立していったのかという点からの事例研究は今後もひきつづき行われるであろう。近年、Sip song pannaをはじめタイ系諸王国の政治統合に関する研究が進められているが、今後はこれまで先学の研究によって徐々に明らかにされている南詔・大理王国組織の実態を手がかりに、更にチベット＝ビルマ系（特にイ族系）集団の権力構造及び政治統合のあり方についての比較研究も必要ではなかろうか。なお、その場合、漢文史（資料）（現代中国の調査報告も含めて）をはじめ、現地で徐々に発掘・研究されている民族固有文献（民族文字及び口頭伝承等）を駆使した緻密な研究が要求されてくるであろう。さて最後に、雲南が東南アジアの植民地化とどのようにかかわっていたのかという点からの研究も今後の課題の一つとして挙げておきたい。例えば、古来より雲南地方に産した鉱山資源に対して、いかに歐米列強（特にフランス・イギリス）が関与していったかという問題は同テーマを考察する場合の一つの指標であるが、いずれにしてもこの方面での課題も多いといわねばならない。

研究余録

大木 昌

一般にプロとは一芸に秀で、それで飯を食っていける人を指す。これに対してアマは、それで身を立てようなどという大それたことは金輪際考えず、ただ下手の横好きを通していいる人であろう。通常プロとアマとの差は歴然としている。翻って、研究者にもやはりプロとアマとの区別はあるのだろうか？ 多分これは研究者が自己規定する問題であろう。

ところで、5年前私は研究対象を西スマトラからジャワに移し、それ以来まだまとまつた仕事はしていない。ジャワ研究に関する限り私は立派にアマである、と考えている。しかも私は、研究にはアマチュアリズムが必要であるとさえ思っている。というのも、アマはプロなら常識として通過してしまう問題をも一つ一つ疑ってかかるからである。以下に、アマの目から見たジャワ史の問題を、近況報告もかねて、独白風に書いてみたい。

ジャワ研究に転向した時念頭にあったテーマは、ジャワ村落の社会経済史であった。当時私は、全くうかつにも、ジャワ村落は集約的水田耕作を行なう定着農民によって構成されていたと考えた。事実、多くのジャワ村落論（慣習法体系や社会組織の研究）は暗黙のうちにこれらを前提としてきた。そこで、伝統村落に対応すべき伝統稻作について調べてみた。予期に反して、ジャワの稻作「史」についての体系的な研究は見当たらなかった。こうして予定外の稻作史研究に数年を費やしたが、その結果次の2点に気が付いた。

第1に、ジャワの伝統稻作の様子が具体的に分かるのは1860年代以降についてであり、通常ジャワの稻作を語る場合、これ以降の形態がモデルになっているようだ。しかし19世紀初頭以前の稻作事情はこれとはかなり違う。即ち、19世紀以前に、絵に書いたような水田稻作が一般的であった証拠を見付けるのは難しく、むしろ焼畑的な農業が目につく。また、米が庶民の常食となったのも19世紀初頭頃のようだ。第2に、上の事情と関連して、19世紀初頭ころのジャワ農民は結構移動していて、彼らが「伝統的」に定着的であるとは断定できない（以上、拙稿『南方文化』13輯、1986.11）。次に、もしジャワで以前に焼畑が行われていたとしたら、その痕跡くらいは追跡できるはずである。これを中・東部ジャワについてみると、予想通り1874年の「開墾条例」（事実上開墾規制条例）まではこの地域においても焼畑は決して例外ではなく、部分的には20世紀初頭まで続いていた（拙稿『アジア経済』28-7, 1987, 7）。なお、興味深いことに、ジャワの森林・荒蕪地は1874年頃まで総面積の70%程（現在は20%弱）を占めていたのである（これについては近く活字になる予定）。この激変がジャワ社会にもたらした影響については今後の検討課題である。さて、以上の農業事情を念頭に置いたとき、いかなる村落像が歴史的に描けるか、が私にとってこれからのが課題である。歴史的には、まず権力の近辺或は水田耕作にとりわけ適した地域において、定着農民よりなる村落が形成され、それが次第に他地域に波及ないしは強制されていったと予測される。私の予感では、この過程を解明することは同時にジャワ史の基底部分を解明することになるはずである。

ところで、定着するということは、権力にしっかりと首ねっこを押えられ、昔ならば徵

兵、労役、租税の負担を課せられることを意味した。余程のメリットがあるか、逃げられない状況に置かれない限り、果して農民は好んで定着＝集約農業に従事しただろうか？もし私が王国時代の農民であったならば、敢て村落の定着農耕民となるよりは、権力から比較的自由な焼畑移動民となることを選択したであろう。当時もそのように思った農民は多数いたに違いない。

個人的好みを研究に持ち込むことは、いやしくも客観性を旨とする学問の世界においては論外であるが、研究もやはり個人的営為である以上これもある程度避けられない。白状してしまえば、上の発想はそもそもジャワ研究とは全く関係のない私の個人的生活感覚と関係している。田畠が工場やオフィスに代わったとはいえ、私には現代産業社会が種々の面で農耕社会の延長線上にあるように思えて仕方がない。そして、そこに生活する我々の姿が、権力の下に定着させられたかつての農民の姿と二重写しとなってしまう。どうやら、現代産業社会（＝定着農耕社会）に対する陰鬱なイメージが、逆に焼畑移動社会に対する私の好みを一層増幅させているようである。

研究に、計らずも個人的生活感覚が反映してしまうことは、私が研究者としてアマであることの何よりの証左である。しかし、これがプロにとつてもある程度避けられないことであるとすれば、研究をし、さらに発表するという行為は、実に恐ろしい所業であると言わねばならない。

新しい日本・東南アジア関係史を求めて

早瀬晋三

「専門は日比関係史ですね」と言われると、多少不愉快になる。卒論は、「マギンダナオの社会変容とクダラット」という題目で、ミンダナオ島の16、17世紀の歴史を扱った。卒業後、18、19世紀のスルー世界の社会経済史研究者 James F. Warren を頼って、西オーストラリア州マードック大学に留学した。卒論の続き、或いは、もっと視野を広げて、フィリピン・イスラム圏の歴史を研究するつもりでいた。ところが、御多分に漏れず外国へ出て日本のことやれと言われ、結局、ダバオ史研究をすることになった。しかし、最初、Warren先生はダバオの日本人開拓史だと思っており、私はあくまでもフィリピン史を専攻する者として、ダバオ史を研究するつもりでいた。この溝は次第に埋まり、4年後、ダバオの少数民族から見た社会経済史として、一応の結実を見る。このような経緯で、日比関係史に関わり合うようになったものの、このテーマは出来るだけ早く切り上げ、本来のミンダナオ史研究に戻ろうという気持ちでいた。それが、7年たった現在でも、日比関係史に関わり続けているのにはそれなりの理由がある。

日比関係史に関わり始めてまず感じたことは、何故、従来の記述は、日本側の資料だけに基づき、日本人しか登場しないのだろうかということだった。しかも、国策としての「南進論」が盛んだった頃の宣伝、誇張、歪曲された歴史像をそのまま戦後に踏襲して、あたかも史実であるかのように現代にまで伝えられている。例えば、ベンケット移民について、最も信頼されてきた文献は、入江寅次著『邦人海外発展史』と蒲原広二（カヨヒジ）著『ダバオ邦人開拓史』である。共に、「南進論」盛んなりし昭和13年刊で、その内容を

兵、労役、租税の負担を課せられることを意味した。余程のメリットがあるか、逃げられない状況に置かれない限り、果して農民は好んで定着＝集約農業に従事しただろうか？もし私が王国時代の農民であったならば、敢て村落の定着農耕民となるよりは、権力から比較的自由な焼畑移動民となることを選択したであろう。当時もそのように思った農民は多数いたに違いない。

個人的好みを研究に持ち込むことは、いやしくも客観性を旨とする学問の世界においては論外であるが、研究もやはり個人的営為である以上これもある程度避けられない。白状してしまえば、上の発想はそもそもジャワ研究とは全く関係のない私の個人的生活感覚と関係している。田畠が工場やオフィスに代わったとはいえ、私には現代産業社会が種々の面で農耕社会の延長線上にあるように思えて仕方がない。そして、そこに生活する我々の姿が、権力の下に定着させられたかつての農民の姿と二重写しとなってしまう。どうやら、現代産業社会（＝定着農耕社会）に対する陰鬱なイメージが、逆に焼畑移動社会に対する私の好みを一層増幅させているようである。

研究に、計らずも個人的生活感覚が反映してしまうことは、私が研究者としてアマであることの何よりの証左である。しかし、これがプロにとってもある程度避けられないことであるとすれば、研究をし、さらに発表するという行為は、実に恐ろしい所業であると言わねばならない。

新しい日本・東南アジア関係史を求めて

早瀬晋三

「専門は日比関係史ですね」と言われると、多少不愉快になる。卒論は、「マギンダナオの社会変容とクダラット」という題目で、ミンダナオ島の16、17世紀の歴史を扱った。卒業後、18、19世紀のスルー世界の社会経済史研究者 James F. Warren を頼って、西オーストラリア州マードック大学に留学した。卒論の続き、或いは、もっと視野を広げて、フィリピン・イスラム圏の歴史を研究するつもりでいた。ところが、御多分に漏れず外国へ出て日本のことやれと言われ、結局、ダバオ史研究をすることになった。しかし、最初、Warren先生はダバオの日本人開拓史だと思っており、私はあくまでもフィリピン史を専攻する者として、ダバオ史を研究するつもりでいた。この溝は次第に埋まり、4年後、ダバオの少数民族から見た社会経済史として、一応の結実を見る。このような経緯で、日比関係史に関わり合うようになったものの、このテーマは出来るだけ早く切り上げ、本来のミンダナオ史研究に戻ろうという気持ちでいた。それが、7年たった現在でも、日比関係史に関わり続けているのにはそれなりの理由がある。

日比関係史に関わり始めてまず感じたことは、何故、従来の記述は、日本側の資料だけに基づき、日本人しか登場しないのだろうかということだった。しかも、国策としての「南進論」が盛んだった頃の宣伝、誇張、歪曲された歴史像をそのまま戦後に踏襲して、あたかも史実であるかのように現代にまで伝えられている。例えば、ベンケット移民について、最も信頼されてきた文献は、入江寅次著『邦人海外発展史』と蒲原広二（カヨヒジ）著『ダバオ邦人開拓史』である。共に、「南進論」盛んなりし昭和13年刊で、その内容を

再検討することは、未刊行の外務省外交史料館文書をみるまでもなく、刊行された『日本外交文書』を通読するだけで充分である。そこには、「日本人によって完成したベンゲット道路」の記述もなれば、「日本人700人の人柱」の記録もない。そればかりか、日本人労働者の評判があまり芳しくなかったことさえ書かれている。まして、アメリカやフィリピンの記録に日本人の功績を讃えたものはない。この「ベンゲット移民」、もともと日本政府はあまり乗り気でなく、試験的に送り出しただけであった。それが、昭和10年代に入って、「南進」ムードが高まるごとに、人々の注意を南に向けるために、アメリカ人にも、中国人にも、フィリピン人にも、成し遂げられなかつた難工事を日本人の血と汗で完成した美談として登場してくるのである。即ち、日本人の優秀性を示す格好の題材として誇張され、利用されたのである。利用されたことにおいて、ダバオのマニラ麻農園開拓史もまた同じである。

ベンゲット移民の話は、戦前・戦中かなり一般にも知れ渡っていた。大石千代子著『ベンゲット移民』は昭和14年上半期第9回芥川賞参考候補作になり、昭和17年から18年にかけて織田作之助はベンゲットの他ヤんを主人公に『わが町』を発表している。そして、『わが町』は、昭和31年、日活『わが町』として映画化され、また、森繁久彌の当たり狂言の一つとなった「佐渡島他吉の生涯」として昭和34年から60年まで10回の公演を重ねている。森繁自身、「この芝居ほど観客にうけたものはありません」と言っている程、好評を得ている〔昭和62年8月11日付筆者への手紙〕。この「南方作戦下の作品として読まれることこそ望ましい」〔『織田作之助全集』3、講談社、1970年、青山光二作品解題、p.355〕『わが町』を素材にして、現在までベンゲット移民の話は伝えられているのである。そして、近年のフィリピン報道ブームの中で、バギオやダバオの日系人についても報道されるようになり、戦前・戦中から伝えられてきている日系人の信じている歴史と、報道関係者が調べた入江や蒲原の記述が一致し、あたかもそれが史実であるかのように報道されている。

以上のような事実を知った現在、私は日比関係史に関わる問題から離れることが出来なくなった。そして、このことは、他の東南アジアと日本との関係史にもあてはまる問題ではないかと考えるようになった。近年、日本・東南アジア関係史をめぐる研究は少なくない。しかし、中には、戦前・戦中の記述を再検討することなく、日本側の資料のみに固執して、日本の対東南アジア政策や東南アジアの日本人についてのみ言及しているものも見られる。外国文献を利用したとしても、補足的に使っているにすぎず、現地側の歴史を踏まえず書かれた日本・東南アジアの関係史は、「侵略者」の歴史に留まるのではないだろうか。それを越える意味においても、まず、現地側の歴史のコンテキストの中で、日本と東南アジアの関係史を問い合わせなければならないだろう。そのための事例研究として「ベンゲット道路工事史」と「ダバオ開拓史」の一応の完成をみるまで、私の本格的なミンダナオ史研究はおあずけのままのようである。

東南アジア史学会昭和61年度会計決算報告

(昭和61年1月1日～12月31日)

I 収入の部	円	会計委員 八尾 隆生	円
会員会費	988,500	事務局移転関係費	6,470
郵便貯金利子	24,031	第35回大会予報費	12,000
名簿売上げ金	3,000	会報no.44、第35回大会プログラム	
大会会場費	51,000	印刷費及び発送費	79,620
前年度繰越金	770,643	第35回大会講演者謝礼	20,000
	1,837,174	第35回大会費	51,687
		会報no.45、第36回大会プログラム	12,000
		印刷費及び発送費	73,500
		第36回大会費	94,598
		第36回大会講演者謝礼	20,000
		通信費	21,230
		事務費	24,685
			415,790
		III 差引残高（繰越へ）	1,421,384
	1,837,174		1,837,174

会計簿、貯金残高記載書類、領収書控帳を点検した結果、誤りのないことを確認いたしました。

昭和61年12月31日 会計監査委員 川本 邦衛 印

地区研究例会

[関東例会]	会場：上智大学
昭和62年 5月30日	「ジャワ島西部ブリアンガン地方社会の変容 —植民地官僚制の胎動—」大橋厚子
7月18日	「ブロー・マンディー農園事件—1920年代の日本の南方関与の一事 例—」鈴木恒之
10月 3日	「サイゴン開港の歴史的位置」菊池道樹
10月31日	「インドネシアにおける『イスラーム法編纂(Kompilasi Hukum Islam)』 作業の現状とその意義について」中村紺紗子

東南アジア史学会昭和61年度会計決算報告

(昭和61年1月1日～12月31日)

I 収入の部	円	会計委員 八尾 隆生	円
会員会費	988,500	事務局移転関係費	6,470
郵便貯金利子	24,031	第35回大会予報費	12,000
名簿売上げ金	3,000	会報no.44、第35回大会プログラム	
大会会場費	51,000	印刷費及び発送費	79,620
前年度繰越金	770,643	第35回大会講演者謝礼	20,000
	1,837,174	第35回大会費	51,687
		第36回大会予報費	12,000
		会報no.45、第36回大会プログラム	
		印刷費及び発送費	73,500
		第36回大会費	94,598
		第36回大会講演者謝礼	20,000
		通信費	21,230
		事務費	24,685
			415,790
		III 差引残高（繰越へ）	1,421,384
	1,837,174		1,837,174

会計簿、貯金残高記載書類、領収書控帳を点検した結果、誤りのないことを確認いたしました。

昭和61年12月31日 会計監査委員 川本 邦衛 印

地区研究例会

[関東例会]	会場：上智大学
昭和62年 5月30日	「ジャワ島西部ブリアンガン地方社会の変容 —植民地官僚制の胎動—」大橋厚子
7月18日	「ブロー・マンディー農園事件—1920年代の日本の南方関与の一事 例—」鈴木恒之
10月 3日	「サイゴン開港の歴史的位置」菊池道樹
10月31日	「インドネシアにおける『イスラーム法編纂(Kompilasi Hukum Islam)』 作業の現状とその意義について」中村紺紗子

[中部例会] 会場：南山大学

主催者が海外出張中のため、次号会報にてご連絡させていただきます。

[関西例会]

会場：京都大学東南アジア研究センター

- | | |
|-------------|---|
| 昭和62年 5月 2日 | 「李朝ベトナムにおける山岳仏教の展開」大西和彦 |
| 6月13日 | 「Sip Song Panna王国の権力構造に関する一考察」馬場雄司 |
| 7月18日 | 「南詔・大理国における統合と宗教」武内剛 |
| 9月 5日 | 「ビルマ語における動詞句内の修飾形態素について；いわゆる『助動詞』のうちわけ」澤田英夫 |
| 10月 3日 | 「元・明時代の旧港について」岩本小百合 |

『東南アジアー歴史と文化ー』原稿締切迫る
No.17(1988年5月刊行予定)

原稿締切: 1987年11月30日

『東南アジアー歴史と文化ー』No.17は例年通り、明年6月に開催予定の本学会春季大会に合わせて刊行する予定にしております。すでに投稿を準備されている方は、原稿締切日をお間違えないようお願いいたします。また、[書評・紹介]、[モンスーン・学会消息]欄への投稿は、今から準備されても十分間に合うかと存じます。奮って御投稿ください。なお、編集の迅速さ、正確さを期すため、下記の執筆要領を御参照の上、完成原稿をもって、御投稿下さるようお願い申し上げます。

執筆要領

学術雑誌としての精密さを高めるために、次の点について御協力をお願いいたします。

1. 投稿論文は編集部の責任によって選定の上、編集します。採用原稿は原則として返却しません。また稿料の支払い、掲載料の徴収はしません。論文、研究ノートの抜き刷りは30部に限ります。
2. 用語は日本語（なるべく当用漢字、新かな使い）で横書きして下さい。欧文、特殊文字（タイ文字等）のある原稿、写真、付図の掲載については投稿前に編集委員会へ御相談下さい。なお、ワープロ原稿は、横書きで行間を開け、40字×10行、40字×20行、20字×10行、20字×20行の何れかになるようにお願いいたします。
3. 論文、研究ノート等の原稿料は200字詰横書き原稿用紙100枚以内、書評・紹介は50枚、学会消息は10枚以内にまとめて下さい。
4. 内容に関する読者の質問のために、本文末尾に郵便連絡の宛先、電話番号を書いて下さい。
5. 論文には欧文要旨(500~1,000語)をつけて下さい。その他の原稿にも英文タイトルをつけて下さい。特に学会消息の英文タイトルは簡潔にして、一行以内に納まるようにして下さい。編集委員会の責任において、欧文の訂正をすることがあります、あらかじめ御了承下さい。
6. 註は本文末尾にまとめて下さい。論文末尾に参考文献をつける場合は次の例にならって下さい。

Hall, D.G.E. 1981. A History of South-East Asia. (Fourth ed.). London: Macmillan. & Co. Ltd.

Damrong, Prince. 1915. "The Story of the Records of Siamese History." Journal of the Siam Society, 11-2. pp.61-92.

太田常蔵 1967. 『ビルマにおける日本軍政史の研究』東京: 吉川弘文館。

岸 幸一 1965. 「インドネシアにおける近代化と地域主義(1)」『アジア経済』4-8. (1965,8). pp.14-27.

投稿についての問い合わせ先：

〒102 東京都千代田区紀尾井町 7-1 上智大学アジア文化研究所気付
『東南アジア歴史と文化』編集委員会 (TEL 03-238-3697)

訂正

前回の会報で以下の誤植がございましたので、御訂正下さい。

誤

正

p.9 1.8	ジャワ語文法	ビルマ語文法
1.14	ラーオ、ビルマ	ラーオ、カンボディア、ビルマ
p.14 1.6	佐藤 正範	左藤 正範

昭和62年10月発行

発行者 東南アジア史学会（会長 石井米雄）
住所 〒606 京都市左京区吉田下阿達町 46
京都大学東南アジア研究センター
電話 075-751-2111 内線 7339
郵便振替 京都 3-30980 東南アジア史学会
